

# 27PB-am132S

## 薬学生より分離したブドウ球菌属の薬剤感受性

○井本 了介<sup>1</sup>, 山本 博之<sup>1</sup>, 高橋 栄造<sup>1</sup>, 斎藤 博<sup>1</sup>, 山岸 純一<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>日本薬大 )

【背景・目的】近年、薬剤耐性菌は院内感染の原因菌のみならず、市中感染の原因菌として、社会・環境全体へ拡大していると指摘されている。私共は、健常人の常在菌(特にブドウ球菌属)に薬剤耐性菌が存在するのかという点に興味を持ち、平成 24 年度から解析を続けている。今回、新たなブドウ球菌属を分離すると共にキノロン薬と他の抗菌薬との交差耐性について調べたので報告する。

【方法】試供菌株は、平成 24 年から平成 27 年にかけて薬学生ボランティア約 800 名より分離した細菌を用いた。細菌は質量分析装置バイテック MS により同定し、薬剤感受性は寒天平板希釈法により求めた。

【結果】健常人の鼻腔、手よりサンプリングした検体をマニット食塩培地で選択し、黄変したコロニー(約 800 株)を分離した。シプロフロキサシン(CPFX)の MIC が 4 $\mu$ g/ml 以上を示す耐性菌の分離数の年次推移は、平成 25 年度が 4 株と少ないものの、他の年度は約 20 株程度であった(合計 64 株)。その内訳は *S. aureus*、*S. haemolyticus*、*S. caprae*、*S. capitis*、*S. warneri*、*S. schleiferi* などであった。*S. haemolyticus* では、CPFX の MIC が 16 $\mu$ g/ml 以上を示す高度キノロン耐性菌が検出された。キノロン耐性ブドウ球菌属の中には、ゲンタマイシンに交差耐性を示すものが多く、アンピシリンにも若干耐性を示す株も認められた。しかし、メロペネム、アミカシン、クロラムフェニコール、テトラサイクリン、ストレプトマイシンやリファンピシリンには耐性株は認められなかった。

【結論】健常人から分離したブドウ球菌属に、頻度は低いですが、キノロン耐性菌が存在することが明らかになった。更に、これらのキノロン耐性菌のうちほとんどの株が、ゲンタマイシンと交差耐性を示すことが認められた。